

追手門学院大学地域支援心理研究センター公開講座（第3回）

「子ども達の健やかな育ちのために(3)」

問題行動の中に見られる子どもの能力と手を結ぶには

講師：追手門学院大学心理学部准教授・「心のクリニック」相談室長
永野 浩二

はじめに

こんにちは、永野です。このテーマを書いてしまってから困ったんです。うまく説明できるかどうかわかりませんが、実践の難しいテーマでいろいろなことを考えられたらなと思っています。

資料をお配りしていますが、概要の方をご覧ください。

テーマは「問題行動の中に見られる子どもの能力と手を結ぶには」ですが、子どもの問題行動の中には、しばしばその子が持っている「優れた能力」が含まれています。一見問題に見えるものの中に可能性がありますので、可能性に目を向けることで、その子の行動自体の本質は残しているにもかかわらず、行動の意味が変化してより豊かな自己実現の方向に進むことがあります。私はカウンセリングを専門にやっていますが、カウンセリングの過程ではしばしばこういうことが見られます。いくつかの事例を紹介しつつ、子どもの可能性をどういうふうに見立てるのか、また、自己実現のために、援助者がどう子どもに内在する可能性と手を結ぶのかについて、一緒に考えてみたいと思います。

お伝えしたいことは、シンプルなんです。問題の中には可能性があるのです。問題を問題としてではなく、とりあえずニュートラルに関わってみましょうということ。でき

るだけポジティブな面を拾いましょうということ。そのためには、本人が問題をいじりまわして厄介な問題にならないように、いじりまわさないですむような、そのまんまでいられるような環境を作りましょう、これが今回私が最も伝えたいこととなります。中身自体はシンプルですが、実際やろうと思うと、結構手ごわいというか大変なことがあります。

皆さん方ももうすでにご存知かもしれませんが、著名人の例をいくつか挙げてます。ご一緒に見てみましょう。

マイクの例

問題行動の中に見られる能力として、マイクの例を出しました。アメリカ人ですね。父親は彼が2歳の時に家族を捨てて蒸発しています。以後、5歳上の兄と2歳上の姉と次男であるマイクは、母親のローラによって養われます。経済的な問題で住居を転々とし、マイクは7歳から、最悪のゲットーと呼ばれていたブルックリン区ブラウンズヴィルで育ちます。最も荒れた地域といわれる場所です。内向的な性格や、大きな近眼鏡を着用していたことから、近所の不良少年達に嘲笑され、いじめの対象となります。大事にしていたペットの鳩を、うちの中で鳩を飼って自分を慰めていたみたいなんですけれども、この鳩を年上の不良グループの少年達が虐殺します。怒りに我を忘

れてその不良達を殴り倒したことから、はじめて自分の腕力の強さに気がつき、この後徐々に荒んだ生活に進みます。9歳から12歳の間に51回も逮捕され、ついにニューヨーク州でも最悪の少年が収容されるトライオン少年院に収監されます。最も悪いっていうんでしょうか、箸にも棒にもかからないとおそらく見られてたんじゃないかと思うんですが。

マイクその後

さて、マイクのその後です。トライオン少年院では、更生プログラムの一貫として、マイクは、ボクシングに出会います。その頃少年院のボクシング担当教官であったボビー・スチュワートにより才能を見出され、繋がりがあった名トレーナーで、ボクシング界ではかなり有名なカス・ダマトっていう世界チャンピオンを何人も輩出したトレーナーがいるんですけども、そのカス・ダマトに噂が伝わって、ダマトがタイソンの才能に注目し身元引受人になり、少年院を出所後、ダマトの下でボクシングの英才教育を受けることとなります。1985年3月6日18歳でプロデビューして緒戦を白星で飾ると、以後11連勝。トレーナーは亡くなるんですけども、トレーナーの遺志をついでというか、より一層精進しその後通算28連勝して、1986年に29戦目に、WBCっていう有名な団体があるんですけど、世界ヘビー級王座を獲得。史上最年少、20歳5ヶ月で世界ヘビー級王者になります。翌年1987年にはWBA世界ヘビー級タイトルを獲得。さらに同年8月、IBFのヘビー級タイトルを獲得し3団体統一に成功します。現役時代のみならず、長いボクシングの歴史において、最盛期のマイク・タイソンはモハメド・アリと並んで、最強ボクサーの有力な候補として、すでに伝説になってるボクサーです。

ジリアンの例

もう一つ、ジリアンの例。これもご存知の方がいらっしゃるかもしれません。

ジリアンは小学生の頃、まったくもって絶望的でした。1930年代のことです。学校は、彼女の両親に、ジリアンは学習障害があると伝えました。集中力がなくいつもそわそわしていた。今だったらAD/HD、注意欠陥・多動性障害という発達障害がありますけれども、そう言われていたことでしょう。学校もさじを投げていた子どもだったんですね。

ジリアンは専門家に連れて行かれて相談を受けることになりました。最終的に医師がジリアンのところに来て言いました。「ジリアン、君のお母さんの話をいろいろ聞いて、お母さんと話がしたいんだ。ここで待ってて」。ジリアンを1人残し、医師と母親は部屋を出て行きました。その際に医師はラジオのスイッチを入れました。そして、部屋の外で母親に「ここでジリアンを見ていてください」と伝えました。するとジリアンは元気に、音楽に合わせて動き始めました。母親と医師はジリアンを見守りました。そして医師は母親に言ったんです。「お母さん、ジリアンは病気なんかじゃありません。ダンサーです。ダンススクールに通わせてあげなさい」。

これ、有名なケン・ロビンソンっていう人が、今ユーチューブにもアップされてますけれども、講演で話してる内容をそのまま抜き出してます。ケン・ロビンソンがジリアンにインタビューをして、ジリアンに「その時どう思いましたか」って聞くと、ジリアンがこう話しました。「ダンススクールに行ってどんなに楽しかったか言葉で表せません。ダンススクールには私みたいな子ばかりいました。みんなじっとしてられないんです。考えるのにまず身体を使わ

ないといけない子ばかりでした」。彼女は、バレエやタップやジャズダンスを習いました。モダンやコンテンポラリー（ダンスの一種ですね）もやりました。ジリアンはやがて後のロイヤルバレエ学校のオーディションにも受かって、見事にキャリアを築きました。それからジリアン・リン・ダンスカンパニーを設立しました。その後、アンドリューと出会い、ジリアン・リンは歴史上もっとも偉大なミュージカルを手がけます。ひとつは「オペラ座の怪人」で、日本でも公演をたくさん重ねています。「キャッツ」もそうですね。劇団四季が手がけてます。その振り付けをしたダンサーです。何百万人の人々に感動と喜びを与え、経済的にも大成功しました。

聖子の例

次は日本人の例です。この聖子さん、心が暖かく物事のけじめもしっかりとついた両親に育てられ、経済的にも困ることのない、一般的な意味における「よい家庭」で育てられ、うらやましいといえるような子ども時代を過ごしました。しかし、女学生の時に強い「万引き衝動」に悩まされたといえます。

「大きな古本屋さんがあったんだけど、店員さんが少ないもんだから、目が行き届かなくて、ほんとにスツと取れそうに思うの。何遍もしたろうかしらなんて思うけど、ついにできない。それも、とくに、お金がある時にかぎって万引きしたくなる」と話したそうです。

この万引き衝動は小学校6年生ぐらいから女学校2年ぐらいまで、結構長い時期続いたといえます。万引き自体はしなかったらしいんですけど、とめるのにすごい困難な、うっかりするとほんとに補導されたような強い衝動だったらしいんです。

聖子その後

その後、その万引き衝動は、あるとき突然消えていったそうです。女学校の2年生の時のことでした。その頃彼女は、「小説の真似事」を書き始めたといえます。クラスメートが彼女の書いた小説を読んで喜ぶので、次々と書きました。それが作家活動の萌しでした。「万引き衝動」と「創作活動」とは根っここのところで微妙につながっているということでした。これは、田辺聖子さんの話、小説家ですね。創作として自分の内にあるものを表現する前に、外にあるものを何が何でも自分の内に取り込みたい、という気持ちが高まったものだろうというふうと考えられる。それは明確に意識されたものではなく、存在の深みの中でうごめいているものだけに、「悪」の形をとりやすく、万引きという欲求として姿を顕してきたのであろう、と。これも亡くなった、日本で有名な心理学者である河合隼雄先生が、実際田辺聖子さんに会って聞いた話で、「子どもと悪」という本に載っているエピソードです。

問題行動とは

マイク・タイソンという史上最も有名なプロボクサーと、ジリアン・リンという稀有な才能を持ったダンサーと小説家の田辺聖子さんと3人の例を出しました。わかりやすいからこの3人をあげてますが、似たような例は、私達が出会う方の中に随分たくさんおられます。才能を持っているけれども発現の仕方が問題行動に見える場合があります。

そこで、問題行動って一体何かということ、簡単に考えてみたいと思うんです。資料をご覧ください。

(資料：一部抜粋)

問題行動

(1)元々持っている資質が問題行動に見える場合

その人の優れた能力（しばしばバランスを欠いていることもある）が、周囲から問題行動に見える。

当然、本人には問題行動という自覚がない場合も多い。特に、周囲が「問題」として指摘するので、むしろ劣等感を持つ場合すらあるが、環境の中で正当な評価が与えられ、表現することが許される場合、能力として発揮され本人の自己実現を促進する。

(2)より大きな問題を解決しようとする努力・工夫が問題行動に見える場合

こちらの問題行動はわかりにくい。詳細は後述。

(3)上記、(1)と(2)が複雑に入り組んでいる場合

しばしば、(2)の対処法が(1)の得意な能力の領域で行われる。

上記(1)の場合、幼少期からその能力の発現が見られる。能力かどうかの見分けは、

- ①やっているだけで楽しそう（楽しい）
- ②少しでも時間があればやってしまう
- ③やることに抵抗が少ないか、当たり前のようにやれてしまう。または無理がない。即ち「性に合う」

問題行動の中には元々持っている資質が問題行動に見える場合があります。その人の優れた能力、これはしばしばバランスを欠いている場合があります。こっちの方がすごい優れていて他のところがあまりに伸びてないので、コントロールに困ったり、うまくいかなかったりということが起こる場合があるんです。当然、本人には問題行動という自覚がない場合も多いです。周囲が「問題」としてこのことを指摘するので、劣等感を持つ場合すらあります。

ジリアン・リンのインタビューをしたケン・ロビンソンさんが、ユーチューブの講演の中でしゃべってましたけど、「この子はダンサーですよ。ダンススクールに通わせてあげてください」というこのお医者さんに出会ってなかったら、おそらく薬漬けにされて、身体をどうしても動かしたい動かさないとものが考えられないという資質が抑えられて、有名なダンサーや振付師に

はならなかったんじゃないかと言ってます。ならないだけではなくて、間違った教育を受けて、持っている資質を抑えるためにエネルギーを使い、持ってない部分を持たせられるためにまた別のエネルギーを使って、随分消耗するんじゃないかと思うんです。一生懸命教育をすると、子どもはうつになりますよね。そんなこと言っちゃいけないかもしれませんが、自戒をこめて、そんなことを考えたりします。二次障害といわれるやつですね。資質を補うためにいろんなことをさせられて、そのことで劣等感を持って、そのことがまた本人の生活を難しくさせていくってことが起こったりします。

さて、そういう場合もありますが、逆に環境の中で正当な評価が与えられて、表現することが許されるとこれが能力として発揮され本人の自己実現を促進することがあります。こういう例は、みなさんのまわりにもあるんじゃないかなと思うんです。特に一流のプレイヤーだったり才能を発揮している人たちが、結構偏った能力を持っています。

問題行動の中で能力とどう結びついていのかわかりにくい場合もあります。

(3)の場合です。より大きな問題を解決しようとする努力や工夫が問題行動に見える場合だとか、上記の(1)元々の資質があって、(2)それから大きな問題が本人にはあって、それをなんとかしようとして、(1)の資質の能力が極端に突出してしまっていて、なんでこんなことをこの子がやっているのかさっぱりわからないみたいなことが起こることがある。こういう何か複雑に入り組んだ場合、何が資質なのかがよくわからないということが起こります。

そういう場合は、どう考えていったらよいかですが、その前に、(1)の元々の資質が問題行動に見える場合のヒントだけ説

明しておきます。資質の場合は、幼少期からその能力の発現が大体見られます。能力かどうかの見分けがいろいろあるんですけども、私はシンプルに以下の3つを指標にしています。1つはやっているだけで本人が楽しそうである。何か快があるみたいだ。2つ目は、時間があればやってる。その子の関心や興味や、動作や内的な傾向がそこに向かおうとしている。それから、やることに抵抗が少ない、当たり前のようにやれてしまう。「性に合う」というようなかたちですね。周囲はもっとこんなふうにしてほしいなという願いがあるけれども、本人はそのことばかりやってみていると、それはその子の「性に合っている」もので、その子の資質が向いている領域です。しばしば環境と齟齬を起す場合がありますけれども、ずいぶん大事なものじゃないかなと思います。

本人の資質を歪めず活かす

それでは、問題行動の中に見られる子どもの能力と手を結ぶにはどうしたらいいでしょう？1つは、資質が見られた場合はこの資質をなるべく歪めない。何とかそれが実現的にならないかと、周りが工夫をすることだろうと思います。これから、皆さんにはその資質が何かわかりにくいという例を、ご一緒してみたいなと思います。

あーちゃんの事例

解決のための努力・工夫が問題行動に見える場合です。ここからは私の自験例です。私のお会いした人たちばかりで全て仮名で、内容についても、プライバシーを守るためにずいぶん加工してあります。そのことをお含みおきください。名前は、あいうえおの順番で仮名をつけてます。

最初は、先生の依頼に固まってしまったあーちゃん。小学校1年生です。成績優秀

で先生から褒められることが多い子でした。ある日、先生が朝の会の時間にやさしくこう言いました。「あーちゃん、イチロー君はね、勉強が苦手だから教えてやってね」。でもあーちゃんは返事をしませんでした。「あれ？ 嫌なのかな？」。それでもあーちゃんは返事をしません。身体を固くして、じっとしています。「お友達には親切にしようよ？ どうしたの？」。そのうちあーちゃんの目にだんだん涙が浮かんできて、ぽろぽろと泣き出したらしいんです。いつもと様子が違うあーちゃんに、先生は驚いて声をかけましたが、あーちゃんは、固まったまま返事をしません。たまたま私その学校に行ってる日だったので、先生があーちゃんを連れてきました。「ちょっと話を聞いてあげてください」みたいなことで、事情をちょっとだけうかがって、あーちゃんとしゃべりました。

何が起こったと思われますか。あーちゃんは、元々はきはきしたすごくかしこい子で、先生の言うことをいやとは言わない、「わかりました」とか「はい」とか言う、すごく良い子だったんです。こんなふうになったことがこれまでなかったので、先生もびっくりしちゃったみたいです。以前に、「あーちゃんは、どうしてぽろぽろ涙をこぼしたと思う？」って高校生に聞いてたら、「あーちゃんはイチロー君にいじわるをされてたからイチロー君に勉強を教えるのがいやだった」「あーちゃんはイチロー君のことが実は好きで、イチロー君に近づきたいけど近づこうと思うと緊張してどうしていいかわからなくて涙が出た」とかいろいろなことを考えてくれて、高校生って想像力すごいなあとと思ったんですが、最初はわからなかったんですね、どうして泣いたか。聞いてもすぐには答えないと先生がおっしゃってたので、すぐには聞かないようにしようと思ってとりあえずあーちゃんと、当

時私はまだ20代で若かったですけども、お兄さんと一緒に遊んでもいいかな、なんて言って、「うん」って言ってくれたので一緒に折り紙とかやりながら、「家で何して遊んでる？」とか話をして、だいぶしゃべってくれるようになって、「先生が心配してるみたいだけど、何があったか聞いてもいい？」って聞きました。「うん」って言ってくれたので、「何があったの？」って聞くと、あーちゃんはこんなふうに行ったんです。

先生が、イチロー君は勉強ができないので教えてあげてねって言ったので、そのことについては『はい』って言いたかったけど、『はい』っていうとイチロー君は勉強ができない子だっていうことを、隣にいるイチロー君に言ってしまってるようで、それはイチロー君を傷つけるんじゃないかと思っただけなんです。そういうふうには説明しないですけど、イチロー君にわるいからみたいなことを言って、「何がわるいの？」って聞いていくとどうもそういうことをしゃべったんです。だけど、「イチロー君にわるいからいやだ」って言うと、先生が、イチロー君のことを思っているのはよくわかるので、「いやだ」って言うと今度は先生にわるいなと思って、そう言えなかった。「はい」とも言えず「いや」とも言えず、どうしようと思ってるうちにだんだん困ってしまって涙が出て、返事ができなくなってしまったっていうのが、あーちゃんのその時の状況だったらしいです。

「なるほど。すごいなあ」と思って、あーちゃんに「この話は先生に伝えてもいいか」って確認して、「はい」って言ってもらったので、先生に「こんな話があったんですよ」って伝えると、先生が「そうですか」って。先生はよくわかって、「ああ、あーちゃんはそんな子です」みたいなことを言って、自分がイチロー君の前でうかつ

な言葉を言ってしまったことをすごく反省されて、それで、あーちゃんに「イチロー君の気持ちも、あーちゃんの気持ちも考えられなくて、ごめんね」って謝ったんです。先生もすごくこまやかな方でした。それで、ますます二人は仲良しになったみたいなんです。

この時のあーちゃんの泣いた理由はずいぶん複雑なものでした。この話を聞いた時に「そこまで考えるのか」みたいなことを言う先生もいたり、1年生ってこわいな、子どもってこわいなって言う先生もいたりしましたが、実際はもっと小っちゃい子どもでもずいぶんたくさんを考えていると思います。そういう例にしばしばお会いすることがあります。うまく言語化ができるかどうかはまた別ですけど、その子が、動けないっていう行動で何をしようとしていたのか、何を実現しようとしてたのかということのをいろいろ考えていくと、そこには豊かな可能性みたいなものがあるって、あーちゃんはそのことで、簡単に「うん」と言ったり「いや」と言ったりしないで、その状態で問題行動をやり続けたことでもっと大きな、全体的にもものごとが良くなることに、ある意味貢献してるんじゃないかって、これは結果論ですけども、そういうふうを考えることもできるなと思うんです。

行動化が頻繁に起こる海野さんの事例

今度は中学生の事例です。年齢が上にいくにしたがって問題行動は何か判りにくくなるんです。小学生のほうが、もしくは小っちゃい子のほうが問題行動自体の意味はわかりやすいんです。すぐ行動に出ますし、直後に出ます。ですが、一般に大人になればなるほど行動に出るまでの時間が長いですし、本人が自分の中で持ちこたえられる時間が長いのでちょっと変わった形が出たりすることがあります。そういう意味

では、小学生よりも中学生、中学生よりも高校生、高校生よりも大学生、大学生よりも大人のほうが、問題行動の中には結構複雑なものが詰まって、一緒にそのことを解決するには時間がかかるなあと感じたりします。

事例を見てみましょう。海野さん（仮名）は、友達の江口さんと一緒にカウンセリングルームに自分達で来ました。「どうしたら自分を変えられますか。勉強しようと思って席に着くけど長く着いてられないんです」と言ってやって来ました。話を丁寧に聴いてましたら、次第に内容が変わっていきました。「私、クラスの中では班長をしてるけど、うしろの男子が私の悪口を言う」みたいなことを言い、さらに「男の子と仲が悪い」という連想からか「私、お父さんとも仲が悪い。小学生になってからずっと」という話がポロッと出ます。オヤッ？と思いながら、「そう。男の子もお父さんとも仲が悪いんだね。男と相性が悪い？」みたいなこと言っていると、「うふふ、そう、小学校6年生のときにつき合った人ともうまくいかなかった」と言うんです。今はそうでもないかもしれませんがこれ聴いてたときは、小学校6年生でおつき合いなんかするんだと思って、私はずいぶんオクテだったので、ほんとはびっくりしたんですけど、一応カウンセラーらしくちっともびっくりしないようふりして「そう、小学校6年生のときにつき合った人ともうまくいかなかったんだね。残念だったね。なかなかうまくいかないね」みたいなことを言いました。すると、「小学校6年生のときは私すごかったんだよ。煙草やってたりとか。私、荒れてた。学校も行きたくなかった」というふうな話をします。「荒れてた」とってぼろって言って、あっ、過去形なんだと思ったんでね。「そう、今は吸わなくてよくなったんだね。よかった

ね。でも、その頃は大変だったね」みたいなことを返すと、ハッとして「うん、そう。今は前よりいい」と言って笑います。そして、少しして、「お母さんには、つき合ってる男の人がいるんだ」という話をし始めました。

カウンセリングでは大体そうなんですけど、大事な話というのは最後に出ます。それまではずーっとこっちの様子を見てるんじゃないかと思うんです。まずは勉強が、成績が上がるようなことで、何て言うんでしょうかね、誰に話してもいいような話からスタートして行って、男の子とつき合ってた話が出てきて、それから煙草の話みたいなことが出てきて、その話を批判しないでずーっとついていくと、最後の最後に、このことを最も話したかったのかなと思ったりしたんですけども、お母さんがお父さん以外の人ともつき合ってるという話が出ました。

海野さんの話からは、母親の浮気をやめさせたいと思っていて、しかしどうやめさせたらいいのかわからず困っている気持ちがよく伝わる気がしました。そして、そのことがなぜ伝えられないのか、伝えられない気持ちも伝わる気がしました。ちょっと書いてないんですけど、海野さんのお母さんは、以前に、また別の人とこっそり隠れておつき合いをしていた時期がありました。そのことがお父さんにばれて別れる別れないって、海野さんが寝ている間に、夫婦が大喧嘩になってそれで目が覚めて、「うわっ、お父さんとお母さんが喧嘩してる」みたいな形で、すごい怖かった思い出があったんですね。朝、リビングに行ったら、お父さんが離婚届をテーブルの上に置いて署名がしてあって、「離婚するんだ」みたいな怖い思いをしたことが前にあったようです。結局この時は、もうしないということどうやむやになっただけなんですけど、ま

たああいうことが起こるんじゃないだろうか、今度こそ両親が離婚するんじゃないかと怖かったらしいんです。お父さんに今回話をすると、すでに前回の母親の浮気で傷ついている父親をさらに傷つけてしまうかもしれない。父親は今度こそ離婚を決めるかもしれない。海野さんが、お父さんとは仲が悪いと言いながら、父親のことを決して嫌ってはおらず、むしろ父親を気遣っているのが、なんとなくですが、こちらに伝わってくる気がしました。一方、お母さんに対して直接「浮気をやめて」と言うと、今度はお母さんが、父親よりも家族よりもその男の人を愛しているというふうに、そういう怖いことになってしまうんじゃないかということをお母さんに、どう転ぶかわからない危機に自分たちがいるんじゃないかと。こういう不安を、状況を悪くしないようにどう伝えたらいいのか判らないようでした。6年生の時に「荒れていた」「あの頃ひどかった。煙草吸ってた」と言うのは、伝えたくても伝えられない自分の中で揺れていた自分の気持ち、海野さんには「荒れていた」と感じられていたものが、身体を通して外に表現されていたものと考えられました。

どうやったら、こういう直接的なリスクを犯さないで、家族の危機を防ぐことができるのか。友達がいましたので、友達の知恵も借りながら3人で、どうしようかねえ、とりあえずどうしていこうかねえみたいなことをあれこれその日は考えたんです。その次の週です。2回目に、海野さんと江口さん、入ってくるなり「先生、私成績が上がった」って話します。「弟がお父さんに頼んで、しばらくお父さんが早く帰って来てくれたら」。弟がお父さんに、「寂しいから早く帰って来てよ」って。弟はお父さんと仲が良いので、弟と相談したらしいんですけど。それでお母さんも早く帰ってきて、

「多分この頃は浮気相手とはお母さん会ってないと思う」みたいなことを言っていました。「また、来週来る。私達1週間待ってたもん！」とメモ帳の裏に日付と2人の名前を書いて私に渡してきました。この後、この2人はカウンセリングルームの常連になりました。

カウンセリングルームに来て、あれこれ雑談したりとか、その時々になんか気になることをしゃべったりしてたんですが、5回目、昼休みに2人はやって来て、しばらくあれこれしゃべった後に、友達の江口さんが「先生煙草吸ったらどうする？ 怒る？

叩く？」と私の方に聞いてきました。どこか何か試してるようでもありました。海野さんを見ると、海野さんはソファにのけぞって座っており、珍しく一言も話しません。何か腹を立てているようにも見えます。「ああ、海野さんに何かあったんだな」とすぐ思いましたが、こちらの様子を見ながら、「そうねえ、やっぱり学校のカウンセラーだから吸ったら怒るかなあ」とかって冗談めかして答えてたら、江口さんが、「えーっ?! なんで?! 理由があっても? どんな理由でも? 例えば家で嫌なことがあって、それでムシクムシクしてても?」みたいなことをしゃべります。明らかにこれは海野さんのことで、かわりに江口さんがしゃべってくれたんだと思いました。女の子2人なので、海野さんのことばかり注意していると江口さんとしては居場所がないっていうんですかね、所在無い感じになるので、江口さんの話もいろいろ聴きながらやってると、そのうち海野さんが自分から話を切り出しました。「先生、あたし煙草吸ってるよ。家、もう嫌」みたいなことを言い出します。「あんまりよくないんか?」って聞くと、「うん」と言って黙り込みました。昼休みが終わったので一旦教室に帰ってもらって、放課後に再び話

に来てもらいました。話の内容は以下のようなものでした。

先日、母親が中年の男性の車で送られて帰ってきたところを見てしまった。海野さんはこういう子ですから勘が鋭くて、浮気相手だと気がついたみたいです。この時は迷ったけれども、思い切って父親にお母さんのことを話したらしいんです。具体的に母親の新しい浮気について話したわけではなくて、「お父さん、最近お母さんとうまくいってる?」「お母さん、ちゃんと大事にしてる?」みたいなことを聞いたみたいなんです。うまく聞いたなあと思いました。お父さんは、「わかった、わかった。ちゃんとお母さんのこと、大事にするよ」みたいなことを言ってくれたらしいです。

海野さんはすごく喜んで、久しぶりにお父さんとちゃんと話せた、と思ったらしいです。お母さんの浮気のこと、これで何とかなるかもしれないと思ったんですが、その日の夜にお母さんとお父さんが話をしていたのを布団の中で偶然聞きました。2人は海野さんが眠っていると思ってたみたいです。

お母さん「ねえ、今日、あの子、お父さんになついていたね」。お父さん「わからんぞ。あいつは頭が悪いからな」。そして、話はそこで終わりました。寝たふりをしながら布団の中でそれを聞いて、海野さんは言葉にならない悲しみと失望を感じたようでした。

「あんなふうに言った。せっかくお父さんと仲直りしたのに、一日で」「あ～あ」とソファにもたれかかります。肝心のことは話し合われず、海野さんの行動は「なついている」という言葉であっさりと片付けられたような気がして、しかも父親は自分のことを「頭が悪い」と言っているのを聞いて、海野さんは心底失望した様子でした。お父さんは照れ屋で、ひよっとしたらこん

なふうにしてごまかしたのかもしれませんが、事実自体は調べてみないとほんとのところはわからないんですけれども、少なくとも海野さんにとっては失望につながるような出来事だったっていうのはありました。

ぼつりと、しかしどこか投げやりに「家を出ようかな」みたいなことを言います。それを聞いて、江口さんが「出なよ！ 私の家に来るといいよ。おいでよ」と海野さんを誘います。江口さんは江口さんなりに海野さんの気持ちを汲んでるようでした。海野さんの失望が私にもよく伝わる気がして、そんな気持ちになるのももっともだなあと思いました。これも喫煙のときと同様で、「家出」という行動によって海野さんの何とも言えない、何か一生懸命この事態を何とかしたいけれども、しかし本当のことを全部言うともっと怖いことが起こるかもしれないので言えずにいた。でも、この危機的な状況を何とかするために、この状態では煙草を吸ってますけれども、煙草を吸ったり、家出をしようとしたりだとか、いろいろな問題行動に手をつけてはやめ、手をつけてはやめ、というようなことをしてたんですね。

家出を勧める江口さんの気持ちもわかるけれども、私は、ここで家出をすることが海野さんの一生懸命な気持ちを両親に伝えることには決してならず、むしろ却って誤解だけを残すような気がして、それはいかにも残念な気がしました。それで、何とか自分の感じていることを伝えてみようと思いました。「そんなことをしても海野さんの気持ちは伝わらないのではないかなあ」と。「ほんとは『こんな家、嫌だ！もういたくない』とか『なんとかしてよ』とか『仲良くしてほしい』と言いたいんじゃないかなあ」と話すと、海野さんは急に身を乗り出して「うん！ そう！」と強く頷きます。「でも家出とかをしてもその気持ちは伝わ

らないで、かえって海野さんが『家を出て、とんでもない娘だ』と思われるのでは？」と伝えると、海野さんは「そう！ そうなのよ！ 先生、私どうしたらいい？」って聞いてきます。カウンセラーはあまりアドバイスしないで、本人と一緒に考えて本人の答えを最優先するんですけども、私はこの状況を何とかする案ていうのが正直みつからなくて、思いきって浮かぶことをとりあえずしゃべってみることにしました。「難しいかもしれないけど、そんなふうに出ないで話してはどうかなあ？ 『私は今の家は嫌。仲良くしてほしい』と。それから、『そのことをずっと言いたかったけど、でも言うとお父さんとお母さんを嫌な気持ちにさせそうで、言えなかった』、そういうことも一緒に」って。私の方は海野さんの気持ちを言葉にしてみました。それを聞いていた江口さんは「え〜っ?! そんなことできないよ」と言いました。私は、その通りでそんなこと確かに言葉になんかできないよな、実際に伝えることは難しいよなあ、大人でも難しいし、と思いましたし、そんなふうにも伝えましたが、海野さんはじーっとそのことを聞いてました。

その後少し黙ってたんですけど、突然「先生、私やっぱり煙草やめる」って言い、「先生、これ預かって」と煙草とライターを私の目の前にぽんと出しました。それは覚悟を決めたみたいな雰囲気があったので、「ああ、じゃあこれ預かってくわ」みたいな形で、私も何も言わずにそれをポケットに入れました。この後、「担任の先生にもこのこと話してもいいか。担任の先生もきっと心配してるだろうし、今あなたがどういう状態にあるのかを知っておいたほうが、あなたのことを誤解しなくてすむような気がするし」って話して、それは言ってもらって構わないと言うので、「じゃあ、だったらどうせだから、これもあなたの手で先

生に渡したらどうかな」と伝えると、「ああ、わかった。私自分で渡すわ」みたいな話になりました。

その後、海野さんの生活が、何もかもすぐにうまくいったかということはどういうことはありませんでした。煙草も時々吸いましたし、男の子とかなり危なく思えるつきあいをしそうな時もありました。その他にもいろいろな事があったんですが、しかしこれまでとの違いは、筆者が学校に行った時に毎回カウンセリングルームに来て、それらのことを話して帰っていったり、手紙を何通も置いていって、それらの行動の背後にある気持ちを見つめていったことでした。ある日の手紙には、次のようなことが書かれてありました。

「今の正直な悩みはねー、やっぱりタバコ。はっきりゆーと、やめたいけど、めっちゃイライラしてしまうー。けど、自分の力でやめるのだ！ えらい？ 私だってやる時はやれるんだから」。

時間がないので割愛しますが、結局、海野さんは、しばらくして成績が20点ぐらい上がったということ、自分は自分で元気に頑張ってるという手紙を寄こして、カウンセリングルームには来なくなりました。

いじめ、不登校、徘徊の事例

いじめ、不登校、それから徘徊があった小山（オヤマ）さん、勿論仮名です。この話をしてみたいと思います。面接までの経緯ですが、小山さんは同級生から名前をもじってからかわれたりとか、「汚い」「話かけても返事がないから生意気だ」「傍にいるけど、声かけてあげてもちっとも何も言わないから、気持ちが悪い」とか、それでいじめにあったことがある子でした。「勉強を教えてやっても反応がない」なんて言われてました。小山さんは、私も声をかけたことがある子だったんですけど、も

じもじしたりとか曖昧に笑ったりするだけで、反応が乏しい生徒に見えました。小学生の時からいじめはあったようですが、小山さん自身はそのことについて誰かに自ら相談したことはなく、こういった情報は唯一の友達である加藤さん（仮名）から、たまたま養護の先生に伝わり、先生方の調査の結果はじめてわかったものでした。

先生方の介入によりいじめは表面的にはなくなったんですが、次第に無断欠席をし始めました。ただし家にもいられないように、小山さんは学校に来ないで、公園や駅でぶらぶらしていました。徘徊ですね。家が留守になる頃を見計らって自宅に戻っていたことが、警察に彼女が補導されてからわかりました。先生方が「どうして休むの、休みたかったの？」と聞いても、小山さん自体は「学校に行く時、わからなくなる」みたいな、聞いてもよくわからない返事でした。

この小山さんですが、カウンセリングルームに常連の加藤さんについて来てて、言葉を交わしたことが2～3回ある子でした。おとなしい子だになってぐらいの印象でしたし、小学校の先生方も、「ああ、加藤さんと一緒にいた子ね」という程度で、印象が薄かったようです。

小山さん、お母さんがいらっしゃらずに、小学校1年までは6つ年上の姉と2人で、別の県の祖母の家に預けられていました。小1になってはじめて父親が姿を見せて、以後父親と3人暮らしになります。この経緯は、小学校の先生もわかってない。私がお会いした時点でも、どうしてお父さんが小学校1年生で引き取るようになったのか、お母さんが何故いなくなったのかということがわかってません。学校関係者は、誰もそのことがわかりませんでした。

父親は小山さんにはほとんど構わず、仕事と自分自身のプライベートの生活を大事

にしているようでした。後からわかったんですが、父親は若い女の人を家によんでいて、小山さんが学校に行けずに家に帰ると、父親が女の人と居て、それでいたたまれなくて家にいられず、結局居場所がなくて、学校にも行けず徘徊しているということです。これも、養護の先生が家庭訪問してはじめて、その事実がわかりました。

小山さんの学力ですが、相当低くて、中2の時点で平仮名がようやく読める程度、時計を見ても時間を正確に理解することが難しく、買い物のおつりの計算も困難だということが、これも正確にはわかってなかったんですけど、後からわかりました。後に児童相談所で検査を受けたんですけども、IQは50前後でした。このとき14歳ぐらいだと思うんですけど、小学校1年になるかならないかぐらいの学力でした。

はじめはカウンセリングでゆっくり話を聴いても、緊張が高くてあまり話はできませんでした。ですが、学校に行かないときの過ごし方とか家族のこととかをたずねていくと、少しずつぼつりぼつりとしゃべり始めました。「何が好き?」「家にいるとき何やってるの?」と聞くと、「料理」ってぼつりと言うんで「料理が作れるの?」すごいね。何作るの?」みたいなことを聞いていくと、ちょっとずつ笑顔になってしゃべり始めました。よく聞くと、お父さんとかお姉さんの分まで料理を作ることがあるとわかりました。ただ、実際のところは小山さんが食事を作っても、お父さんもお姉さんもほとんど一緒に食べることはなくて、夜は誰もいない部屋で一人で夕食を食べることが多かったらしいです。「ああそう。それは残念だねえ」と言うと「一人の方が気が楽」って、この時点では話してました。

それからテレビや音楽の話を聴いていくと、ちょっと辻褃の合わないところがあるんです。これもよくよく聴いてみると、新

聞が読めないのです、一体何曜日の何時にど
ういうテレビがあるのかよくわかってない
んです。友達とアイドルの話をするのに、
「昨日のテレビ何とかだったね」って言わ
れて、そのテレビを見たいけど、どのチャ
ンネルで何があるのかわからないからそれ
が見れないんです。

でも、そんなふうにして話をしてたら1
時間ぐらいは結構経っちゃって、「うわ、
1時間経ってるよ。だいぶ話したね」みた
いなことを言うと、「話すの苦手」って照
れて笑いました。この時初めて自発的に、
「皆がわーっと話すんで話せない。話した
ら止めてしまいそう」って自分から話しま
した。判りにくいんですけど、言葉を補う
と、クラスの中では友達はワーツとしゃべ
ってて、彼女が声をかけると皆の話を止め
てしまいそうだ、ということらしいんです。
こんなふうに言葉が乏しいので、ちょっと
補うみたいなことをしないといけないんで
すが、友達が言った、「この子はあんまり
しゃべらない。だけど近くにいる。近く
にいて声をかけても返事をしない。気持ち
が悪い」っていうのが、何が起こってるの
かがようやくわかる気がしました。小山さ
んにとっては友達とつながる話題がなくっ
て、唯一、友達と離れてしまわない方法が
友達の話の邪魔をしないということなんだ
なあと、それがようやく判りました。いい
関係を作るための工夫だったんだなあと
思います。そうすると、一見気持ちが悪いと
見られる、そこにいてじーっとして何かよ
くわからない話を聞きながらでも離れない
で、声かけられても反応できないけれど
もみたいな形でやってるのが、この子なり
の友達と居続けるための工夫だということ
がわかりました。工夫がはじめの原因にな
ってるっていうすごい残念な、悪循環みた
いなことが起こっていたんです。

「そうだったんだねえ」みたいな話をし

てると、自分から「死にたいと思うこと
もあった」みたいな話をぼろっと話しま
す。もっともだなあと思いました。「1年
の時には学校に来てたけど、楽しくなかつ
た。2年になっても楽しいことないし」と
言うので、「ずっと楽しいことない気がし
てたのね？」って聞くと「うん」と頷きま
す。「頑張ってきてたのね。死ぬのやめたのは
どうして？」って聞くと、「先生が死んだ
らいけないって言ってたし」と言いました。
素直な子なんです。

この面接の後、一旦保健室に戻ってら
って、別室登校の子だったんですけど、私
がご飯を食べに外に出て部屋に戻ってく
ると小山さんが部屋にまた来ていて、「先生、
折り紙折って」って言うんです。2人で鶴
だとかだまし船、コップだとかカメラだ
とかを折り紙で作って、落ち着いた時間を過
ごしました。この日は養護の先生から「面
接が終わったら帰っていいよ」って彼女は
言われていたんですが、結局最後まで残り、
掃除時間にカウンセリングルームの掃除を
手伝ってくれました。

以後の経過です。小山さんは人と話すの
が確かに苦手でした。緊張感も高く、言葉
は判りにくかったです。しかし、料理を作
る能力があること、それを媒介に家族に関
わり続けようとしたり、友達の会話を邪魔
しないように配慮しながら関わり続けよう
とする関係維持の意欲があること、先生の
アドバイス、たとえば「死んじゃいけない」
とかっていうのを聞く素直さがあること。
さらに手作業。折り紙とか料理が好きで、
それらを不器用ながら楽しめる能力があ
ること、そういうことが性に合うことな
どが筆者には感じられました。鶴を折って
も勿論あまりきれいに折れないんです。こ
ういう子ですから不器用なんですけれど
も、楽しそうなんです、やってて。

そこで、小山さんにとって一番大事なの

は、関わりたいっていう子であるし、彼女に関わってくれる人の存在で、表現が乏しい小山さんの表現の手段を増やすことではないだろうかと考えました。小山さんは、自分の感情を直接表現するための媒介をあまり持ってないように見えました。友達だけでなく先生方ともほとんど関わりが持たないために、学校に行きたくない気持ちすらも、誰にも言えないままになっていました。そのために一人で徘徊することになりました。せめて学校に行きたくない時に、その思いを伝えられる人を作ろう、その思いを表現する手段を作っていこう、と考えました。

既に保健の先生が細やかに小山さんに関わってましたので、少しずつ雑談程度の話はできるようになってきてました。それで、私も保健の先生を通じてそこにまぜてもらうことにしました。具体的には、小山さんの数少ない得意な領域を探して、そこでの会話を増やして関係を作っていました。例えば料理の話ですね。

それから、言葉の苦手な小山さんに、言葉を使わないでよいコラージュ療法、写真を切り抜いてペタペタ貼るっていうカウンセリングの方法があるんですが、それをやりました。写真がすごくきれいですし、好きなものを切り取って貼るとそれなりに美しいものができるんです。この子すごい不器用なんで、ものすごい大きなやつを切り取ってただ2～3枚パタパタと貼るだけなんですけど、そういうコラージュを少しずつ貼り始めました。

ある時、短い時間にたて続けに6枚の作品を作ったことがありました。次の回も更に6枚の作品を作り上げて満足そうにしていました。その作品を大好きな先生に見せたりし始めました。それが小山さんからのコミュニケーションの広がり始まりでした。ある時、先生方にあげるために田舎か

ら送ってきたミカンを持ってきて配ったり、同じ別室登校の女の子や大好きな養護の先生にバレンタインのチョコレートを持ってきたりしました。急激にコミュニケーションが広がっていきました。この間、小山さんの話は養護の先生や担任の先生、小山さんのことを心配していたたくさん先生方が聴いておられました。

小山さんの徘徊はこの辺から止んで、別室登校という枠内で、学校内で様々な形で表現されるようになっていきました。学校を休まなくなった代わりに、学校の中で熱を出すようになったり、腹痛が出たりしました。これは段階があるんですけど、問題行動を出さなくなると身体化する場合があります。身体化が治まるとその後言語化ができるようになったりとか、そういうプロセスがあります。

そんなふうにしてコミュニケーションの質が変わってきて、教室で過ごせることが可能になってきました。その頃、嫌がらせについても、以前はほとんど表現しなかったと思われませんが、嫌なことを照れながらも嫌と言えるようになりました。一人で食べる夕食の時間を「一人はさびしいのよね」とやっとならすようになったり、同じ別室登校だった友達と大きな声で言いあったり、嫌なことを言う友達に「お前、うるさい!」と乱暴な言葉で文句を言えるようになったりしました。また、大きな声で笑ったりするようにもなりました。表現は随分豊かになって、学校の問題とか家族の問題とか友人との関わり方にはまだまだ小さな問題や大きな問題、いろんなことがありましたけれども、取り敢えず適応に向かって動き出した事例でした。

問題行動に見られる子どもの能力と手を結ぶには

さあ、もう時間があまりありませんので、

ざっとまとめてみたいと思います。

問題行動に見られる子どもの能力と手を結ぶのは、結構時間のかかることだと思うんですけども、それを大雑把にいくつかにまとめると以下のようなことになると思うんです。

当たり前のことのような気もしますが、一つは関心を持つこと。問題行動と名づけるとその時点でここに対する関心の偏り、関心は関心でも肯定的じゃない、否定的な感じの関心になってしまいがちです。これを何とか問題と言わないで、違う名前をつけられないかという工夫が必要だと思うんです。いったん「大きなこと－小さなこと」、「良いこと－悪いこと」、将来とか現状に「役に立つこと－立たないこと」とか、「意味のあること－ないこと」とかの評価をしないで関心を持つことが、能力と手を結ぶためのコツかなって思ったりします。徘徊っていうのは問題行動ですけど、学校へ行かないで徘徊することで、一体この子が大きな意味で捉えた場合の自己をどのように説明しようとしているのか。今の状況をより良くするための行動が、より良くするためのヒントが、徘徊という行動の中にないだろうかということを考えることですね。

2番目は関心を持っていることを態度で示すこと。これは、もう一つすごく大事なと思うんですけど、関心を持っててもそのことがきちんと相手に伝わらなければ、しかも良い感じで関心を持ってらんだということが相手に伝わらないと、相手がその行動や考えの中にある最も大事なことを開いてくれませんので、そのことを態度で示す。具体的なこととして、子どもの「好きなこと」とか「生き生きしている状態」を多方面から尋ねること。「好きなこと」「生き生きすること」は生活の中にしばしばあります。生活の中っていうのは、勉強に関係ないことだったり将来にあまり役に立た

ないことだったりの中に、結構大事なことが含まれているなと思ったりします。もしくは一見、邪魔になるようなことだったりとかですね。問題行動の中にしばしばその萌芽が表われてることがあります。これは各事例で見てきた通りです。

3番目。問題行動って呼ばないために、何かないかなと思ってたら、神田橋條治先生っていう、私も大好きで時々教わっている先生がいらっしゃるんですが、この先生が問題行動に「〇〇の能力」っていう言葉をつけてみることを勧めておられます。小山さんの場合だと、「ただ傍にいる能力」「関係維持の意欲・能力」とか「手作業の能力」などですね。「傍にいてじっとしている気持ちの悪い子」っていうんじゃないで、「何もしないでも傍にいることができる能力」みたいな違う言葉にしてあげる。

で、4番目。その状態が本人により無理なく増えるために、何があったらよいのかを考え、小さな実験を共有すること。例えば、手作業が好きな小山さんにとっては、コラージュを一緒にやったらどうだろうかと考え、試してみる。これは、小山さんの場合、無理のない方法じゃないかなと思うんです。そんなふうにして、もともと持っている能力が適応的になるべく使えるようになっていってほしいですね。それが本人のもともと持っている資質に無理がない方向なんじゃないかと思うんです。

時間ですね。突然電池がきれたような感じになりましたけれども、これで終わりにしたいと思います。